

「徳島大学地域再生塾」 地域のやる気と大学の知の出会い

徳島大学地域再生塾長（薬学部長）
高石喜久 たかししゅくひら

*再生塾の成り立ち

塾は平成18年8月に徳島大学と那賀町が交わした地域再生をテーマとする連携協定により、那賀町延野に設けられた拠点を中心に展開しています。現在、大学教員が4人（総合科学部：吉田教授、工学部：山中教授、真田助教と高石と7、8名の学生が定期的に那賀町を訪れ、塾生、役場職員と協働して地域の資源の掘り起こしを考え、実践しています。

*基本方針と取り組み

塾は基本的には「老人の元気な作り」への貢献を目指しています。塾での自由な意見交換の中から色々なアイデアが出てきます。それやってみようとなると、塾生まで結成した地域再生塾丹生谷応援団が中心となって取り組みます。川原で食事を楽しむ慣習「喰い川」を都市部住民への紹介、剣山・那賀川源流・滝など地元景観資源の踏査、地元のお婆ちゃん達が作るお萩「はんごろし」と「柿の餅」の売り出し作戦、山菜の試験出荷、地元産のミニ四国八八力所（水崎廻り）のPRを買って出たりと、様々です。

*塾生の温いぬい（ぬい）思いが全て

地域に今あるものに目を向けて、

わいわいがやがや言っている内にだんだん楽しくなって、知らない間に具体的な段取りを話し合っていることも少なくありません。

私達教員と学生はその輪の中に、私達の視点から加わってきました。イメージキャラクターの提案や応援団結成へのアドバイス、山菜パンフや水崎廻りマップ作成への協力等の他、先進事例の紹介や講演会の開催そして塾生の取り組みに対するアドバイザーの招聘（山菜プロジェクトへ阿波観光ホテル総料理長を招聘など）などです。塾には、地域再生に寄せる様々な温い（ぬい）思いが集まっています。開講時間は夜6時半から2時間程度で、家に帰ると11時頃になることも多く、教員の負担も多のですが、我々をそこで待っていてくれる人が居る限り共に地域の活性化を求め進めたいと思っています。

*そのきっかけ

そして今、塾生達は自分たちが行動することで情報が発信できること、情報を発信するところには新たな情報と人々が集まってくることを感じ始めています。

自分たちの足下には魅力的な資源がまだまだ埋まっているはず、そう

脳と心との関係に話題を絞って

この本は、『コンディヤックの思想』（勁草書房、2002）、「人間科学の哲学」（勁草書房、2005）に続く、私の三冊目の単著です。前二著もできるだけ平明な言葉で書いたつもりですが、そうはいっても読解にはある程度の知識が必要かもしれません。

今回書いた『認知哲学』では、脳と心との関係（いわゆる心身問題）に話題を絞って、関係領域の基本的な発想や重要研究を、それらの発見・発明の歴史的背景にさかのぼって説明した上で検討していますので、まったくの初学者にも理解できるのではないかと思います。

感じた塾生達が今度はどうな行動をし、どんな情報発信をするのか、ご注目いただきたいと思っています。



『認知哲学』

出版社：新曜社（近刊）

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
基礎科学研究部門 人文科学分野

山口 裕之 やまぐち ひろゆき



近日発行予定

この本で取り上げたのは、「コンピュータはなぜ計算しているといえるのか」、「コンピュータは意識を持っているといえるのか」など、コンピュータ科学からの意識研究における話題（第一部）、「脳はなぜ計算しているといえるのか」、「脳の各部分の機能を特定する研究で何が分かり、何が分からないのか」などの脳科学研究における話題（第二部）、「物理化学的に作動する脳からどうして自由意志が生じるのか」などの哲学的な話題（第三部）です。

「人間の心とはなんだろう」、「思考するとはどういうことだろう」といった疑問を抱くすべての方に、最初の一冊として読んでいただければと思います。現在、出版社のほうで出版の準備作業を進めてもっていますので、遅くとも七月には書店に並びます。ぜひ一度お手にとってご覧ください。（なるべくなら買っていただきたいとおもっています。）

有機化学を好きになっしょい

【取材】

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 有機合成薬学分野
吉田 昌裕 よしだ ますひろ

吉田先生の「応用有機化学」の授業は、ほとんど手を休めることなく板書と説明。学生は最初に配られたプリントの行間やノートに黒板を書き写していく、という形で進んでいきます。部外者には一見退屈そうに見えますが、居眠りをしたり手を休める学生は一人もいません。学生のコメントにもあるように、これがわかりやすいのだそうです。

プリントの内容は授業のアウトラインを示したものとなっており、その行間を板書が埋めていきます。さらに教科書にも沿っており、ページ数が書かれてあるので後の復習や確認にも役立ちます。

日本の真ん中の愛知県で生まれ、北の東北大学を卒業後、4年前南の徳島大学へやってきた吉田先生。父親が理科の先生で、子供のころから一緒に、植物や生物観察のために野山を駆け回りました。科学を好きになる第一歩でした。また高校時代の化学の先生の影響も大きく、薬学部を選択するきっかけとなりました。

「いかに学生が眠らない授業をするかと考えとき、私自身、大学時代はあまりまじめな学生じゃなかったのですが、好きだった有機化学の先生がこのスタイルで講義を行っていましたので参考にさせてもらいました。毎回の小テストは最初学生からいやがられるかなと思うんですが、授業評価アンケートをとるとこれが意外と好評なようです。」

授業が終われば、質問やアドバイスを受けるために教壇に駆け寄る学生や、さらに研究室まで押しかける場合も。

「良い先生、良い授業との出会いは大切です。だから自分もそのように努力して、創薬に興味を持ってもらい、有機化学をもっと好きになってほしいですね。」



徳島大学の教育力
魅力ある授業

受講生のコメント
板書がきれいで読みやすいです。小テストも復習ができるので、すぐ前の授業の内容を思い出せます。有機は難しいけど、やりがいを感じさせてくれます。

特集「春です よこそ徳大へ」を読んで



●新入生に向けて、いろいろな角度から紹介されていて良かったと思います。
在學生も知らない内容もあり、非常に有益だと思います。
●徳大を新入生に紹介するという意味ではこの特集は良かったと思います。
サークル等のもう少しやわらかい内容のページがもっとあっても良かったのでは・・・。
●新入生に徳大に対する親近感や大学生活に期待を抱かせるようないろいろな歓迎の言葉や記事が工夫されていて、とても良かったと思います。

●特にひとり暮らしを始めた学生さんには「食」は大切なことです。この記事のように、直接経営者の方々から取材した内容は、それぞれこだわりが感じられ、親御さんも、学生と同様、安心して食生活に利用できる指針となると思います。
●新入生向けという方針が一貫していたように思われました。全体に面白いと思いました。ただ、学外者が見ても面白いかどうかは微妙だと思います。

読者の言葉

とくtalkへのご意見

●学部間のつき合いが少ないため、それぞれの学部・学科・その卒業生の行く末など、知らないことが多い。これらを紹介するのは面白いのでは？
●研究室紹介や部活サークル紹介などは、1つあたりを小さなスペースにして、1つの号につきたくさんの方の活動を紹介したいと思っています。学生さん達が広報に載る機会が増え、より身近なものになるのではないのでしょうか？
●留学生の方の記事など、興味深く読ませていただきました。その人がなぜ徳島に徳

大に来ようと思ったのか、知りたいなと思いました。
→編集委員会では、「とく talk」をより多くの方々に興味をもって読んでいただけるよう、様々な視点から構成を見直し、新鮮な情報をお届けするための検討を行っております。特に、課外活動を含む学生の日常生活についての生の声を紹介できるような記事も盛り込んでいきたいと考えております。